

論文

自己肯定感におよぼす親との過去の接触経験の影響に関する検討

— 女子大学生の場合 —

¹諸井 克英 ²迫田 菜々子¹同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・特別任用教授²同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・2021年度卒業生**The Exploration of the Influence of the Past Relationship Experiences with Parents on Self-Affirmation in Female Undergraduates.**¹MOROI Katsuhide ²SAKOTA Nanako¹Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Special appointment professor²Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate of 2021

Keywords: past relationship experiences with parents, self-affirmation, covariance structure analysis.

I. 問題

諸井 (2014) は、子どもから大人への移行期において心理的自立課題に直面する青年の家族環境認知が自己に対する肯定的感情 (Rosenberg, 1979) である自尊心 (self-esteem) にどのように影響をおよぼすかを検討した。そのために、女子大学生を対象として、a) 小学5・6年生の頃の父親および母親との接触経験認知、b) 現在の家族機能認知 (諸井, 2007参照)、および c) 現在抱えている自尊心を測定し、観測変数の構造方程式 (最尤推定法; 豊田, 1998) の分析を試みた。得られた最終モデルによると、「小学5・6年生の頃の父親や母親との情動的絆経験認知⇒現在の家族機能の意思疎通認知⇒現在の自尊心」という影響経路が浮き彫りになった。

本研究では、諸井 (2014) が得たこの知見を再検討する。諸井の研究では自尊心を最終変数に設定した。しかしながら、後述する田中 (2008) が指摘するように、この自尊心という心理学的概念とその測定の仕方に問題があると考えられる。そこで、最終変数を自尊心よりも、測定論的に明確化した自己肯定感 (self-affirmation) に修正した上で、

過去における親との情動的接触認知が現在の自己肯定感にもたらす影響を再度検討する。

田中 (2008) は、PsychoINF を用いて1960年から2006年の間に自尊心 (self-esteem) を扱った研究数を調べたところ、増加の一途であり2000-2004年には5,000件を上回ることを確認した。これは、心理学研究における自尊心概念の重要性を示している。この概念を測定するために Rosenberg (1979) が作成した10項目から成る自尊心尺度が最も利用されることが多い。田中はこの尺度の問題点について論じたのである。この尺度では単一次元性が仮定されているが、因子分析や信頼性分析などで「私は、もっと自分を尊敬できたらと思う。」という項目が排除されることが多い。ちなみに、諸井 (2014) の研究でも信頼性の検討によりこの項目が排除され残りの9項目が用いられている。

田中 (2008) は、a) 自己に対する評価とは異なる向上心評価の混入や、b) 訳語の適切さ (respect の意味) などを指摘し、新たに9項目から成る自己肯定感尺度を再構成した。この尺度は、主成分分析などを用いて十分な信頼性が得られている。

ところで、Rosenberg (1979) による尺度は、高い自己評価を表す項目と低い自己評価を表す項目のそれぞれ5項目から構成されている。田中 (2008) による自己肯定感尺度も前者が5項目、後者が4項目設けられている。特定の心理学的概念を測定するために作成される心理学的尺度では、通常複数の項目から構成される。その際、特定の概念に一致する方向に表現される項目と特定の概念と反対方向に表現される項目が用いられ、後者の得点を逆転した上で、単一次元性の検討が行われる。これは、項目表現の方向性を変化させることにより、回答者が冗長になることを抑え、項目に対する構えを明確にするためである。

教育社会に生じている様々な問題への取り組みの中で、児童・生徒・学生の自己肯定感の向上が重要視されている。この流れの中で、用いられている自己肯定感尺度は、自己肯定感を表す項目のみから構成されている。例えば、小学生や中学生を対象に岩永・柏木・芝山・藤岡・橋本(2013)が作成した尺度は、自己肯定感を表す8項目から構成されている。栗田 (2019) もこの尺度を用いている。大学生の自己肯定感の測定を試みた吉森 (2015) も自由記述に基づき項目を作成し、9項目から成る自己肯定感尺度を作成している。ただし、9項目のうち1項目は、自己肯定感と逆の表現内容の項目である。

他方、佐藤 (1994) によれば、青年心理学の流れで青年が自分に対して自己嫌悪感や自己否定感をもつことが指摘されている。これに従って、佐藤は、自己嫌悪感を「自分が、自分で、今の自分がいやだと感じる」と定義し、中学生から大学生までの自己嫌悪感の発達的变化を捉えた。自由記述に基づき49項目から成る自己嫌悪感尺度を作成した。因子分析を用いて、自己嫌悪感が未分化である中学生段階から対人的側面と対自的側面と明確化していく発達的变化を明らかにした。

水間 (1996) も、青年期における自己嫌悪感に注目し、「客観的事実はどうであれ、否定的な感情や事象が自分自身に由来するとし、自分が自分自身のことをいやだと感じる」と自己嫌悪感を定義し、自己嫌悪感尺度を作成した。この尺度は、大学生を対象とした自由記述調査に基づく21項目から構成される。なお、21項目すべてが自分を否定的に評価する方向に表現されている。

以上に述べたことをまとめると、次のように考えられる(図1)。Rosenberg (1979) が測定を試みた自尊心は、単一次元概念と仮定されている(つまり、高自尊心の逆は低自尊心)。対照的に、自己肯定感や自己嫌悪感という概念は、自尊心の2次元性を仮定している。それぞれの概念は、1次

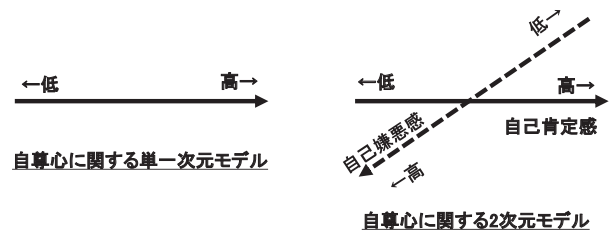


図1 自尊心について仮定される2つのモデル

元上にある反対概念ではなく、独立的に弁別される概念である(直交的ではなく、斜交的に交差していると仮定できる)。

前研究(諸井, 2014)ではRosenberg (1979)の自尊心尺度を用いたが、本研究では、自己嫌悪の表現を除いた自己肯定感尺度を用いる。この上で、過去における親との情動的接触認知が回答者が抱いている現在の自己肯定感にどのような影響をおよぼすかを観測変数の構造方程式によって検討する。これが本研究の主目的である。本来は、自己嫌悪感への影響も同時に調べるべきであるが、研究の第1段階として自己肯定感のみを最終変数とした。

これらの目的のために、前研究(諸井, 2014)と同様に女子大学生を対象とした質問紙調査を実施した。

II. 方法

1. 調査対象および調査の実施

京都府内に位置する私立女子大学での社会心理学関係の講義を利用して調査が実施された(2021年5月17日~25日)。コロナ禍を考慮して「マナビー」(さまざまな機能のうちアンケート機能)を用いた。システムの性質上匿名性には欠けるが、実施にあたってa) 結果を全体として処理し個人ごとに回答を問題にしないことやb) 成績と無関連であることを強調した。その上で、研究の目的と意義を簡潔に説明した。

青年期の範囲を逸脱している者(25歳以上)を除き、352名を分析対象とした(2年生224名、3年生100名、4年生28名)。平均年齢は19.70歳($SD=.86$, 18~24歳)であった。なお、「小学5・6年生の頃」に死別や離別のために父親あるいは母親がいない者がそれぞれ24名、5名おり、両方がいた者は325名であった(父親、母親いずれもいなかった者は2名)。

2. 質問紙の構成

「マナビー」によって呈示された質問紙は、回答者の基

本的属性に加え、a) 対父親・対母親接触経験尺度（過去）、および b) 自己肯定感尺度から構成されている。

(1) 対父親・対母親接触経験尺度（過去）

回答者が小学生時代に父親と母親との間の接触に関する認知を先行研究（諸井・小切間・荒木，2010；諸井，2014；諸井・芳賀，2018）と同じ尺度（対父親・対母親接触経験尺度（過去））を用いて測定した（表1，付表2参照）。

対父親接触経験尺度（過去）では、回答者に「小学5・6年生の頃」の父親との関係の様子を思い出させ、22項目それぞれがあてはまる程度を4点尺度で回答させた（「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」）。母親についても同様な仕方で評定させた。なお、「小学5・6年生の頃」に死別や離別のために父親あるいは母親がいない場合には、該当する設問を飛ばすように指示した。

(2) 自己肯定感尺度

回答者が日常的に抱えている自己肯定感を岩永ら（2013）が作成した自己肯定感尺度によって測定した。

岩永ら（2013）は、自己受容、他者受容、勤勉性、および自身を表す項目をそれぞれ2項目ずつ作成し、自己肯定感尺度とした。小学生（5・6年生）と中学生（1・2年生）に実施して因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、小学生で1因子解、中学生で2因子解が抽出された。栗田（2019）は、この尺度を中学生（1～3年生）に実施し、単一次元性を確認した（ α 係数値，因子分析（主因子解））。

本研究では、この尺度を単一次元尺度と仮定した。小・中学生を対象とした岩永ら（2013）による項目を大学生用に修正した（表2参照）。

回答者にこの6ヵ月間の生活を振り返らせ、8項目それぞれに表されている気持ちにどの程度あてはまるかを4点尺度で評定させた（「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」）。

Ⅲ. 結果

1. 尺度の検討

(1) 対父親・対母親接触経験尺度（過去）

2種類の接触経験尺度それぞれについて、項目平均値の偏り（ $1.5 < m < 3.5$ ）と標準偏差値（ $SD > .60$ ）の基準を設けチェックした。対父親では4項目（ $m < 1.5$: fa_a_10, fa_b_8; $m \neq 1.5$: fa_a_3, fa_b_3）、対母親では7項目（ $m < 1.5$: mo_b_8; $m \neq 3.5$: mo_a_8, mo_b_9, mo_b_11; $m > 3.5$: mo_a_2, mo_a_4, mo_b_5; $SD < .60$: mo_b_8）がそれ

ぞれ不適切であった。これらの項目を除きそれぞれの尺度で因子分析（最尤法，プロマックス回転（ $k=3$ ））を行い共通性の確認をしたところ、対父親では18項目すべて適切であったが（ $> .20$ ）、対母親では不適切な値を示した1項目（ $< .20$: mo_a_7）を除去した。

それぞれで先行研究に従って（諸井ら，2010；諸井，2014；諸井・芳賀，2018）、2因子解を求めた。因子分析では、a) 特定因子への負荷量が十分に大きく（絶対値 $\geq .40$ ）、b) 他因子への負荷が小さい（絶対値 $< .40$ ）という基準を設定した。各項目が単一の因子にのみ.40以上の負荷量を示すように項目を削除しながら a) と b) の基準を充たすまで分析を反復した。このようにして明確な因子パターンを得た。

対父親，対母親ともに、先行研究（諸井ら，2010）と一致した明確な2因子解が抽出され（表1）、それぞれ「情動的絆」と「統制」の2因子が現れた（対父親：第I因子「情動的絆」、第II因子「統制」；対母親：それぞれ「統制」，「情動的絆」）。

次に、因子分析の結果に基づいて、各因子への負荷量を基準（絶対値 $\geq .40$ ）に下位尺度を構成した。下位尺度ごとに、1次元性の確認を行ったが（項目-全体相関分析， α 係数）、適切な値が示されたので（表1）、構成項目の平均値をそれぞれ下位尺度得点とした。

(2) 自己肯定感尺度

8項目すべての平均値と標準偏差値は適切であった（ $1.5 < m < 3.5$ ， $SD \geq .60$ ）。8項目を対象とする因子分析（最尤法，プロマックス回転（ $k=3$ ））での共通性も良好であった（ $> .35$ ）。因子分析では2因子解も可能であり（初期因子固有値の推移：3.90，1.00，.91...）、岩永ら（2013）が設定した他者受容2項目（self_6，self_8）が第II因子として分離した。この結果は、岩永ら（2013）の中学生の結果と一致している。しかし、初期因子固有値の推移からこの尺度は8項目から成る単一次元尺度であると見做し、単一次元尺度の確認を行った（表2）。a) 主成分分析での第I主成分の説明率、b) 第I主成分の未回転負荷量、c) Cronbachの α 係数値いずれも良好であった。そこで、8項目の平均値を自己肯定感とした。

「小学5・6年生の頃」の父親あるいは母親の不在の自己肯定感に対する影響を検討したが、有意差は見られなかった（父親：父親なし（ $N=24$ ） $m=2.77$ ， $SD=.72$ ；父親あり（ $N=328$ ） $m=2.90$ ， $SD=.58$ ， $t_{(350)}=-1.05$ ， $ns.$ / 母親：母親なし（ $N=5$ ） $m=3.13$ ， $SD=.82$ ；母親あり（ $N=347$ ） $m=2.89$ ， $SD=.59$ ， $t_{(350)}=.87$ ， $ns.$ ）。

表1 対父親・対母親接触経験尺度に関する因子分析（最尤法，プロマックス回転（ $k=3$ ））の結果
一回転後の因子負荷量

当該因子負荷量		当該因子負荷量	
〈対父親〉		〈対母親〉	
〔I. 情動的絆〕 [$r=.42\sim.65, \alpha=.86$]		〔I. 統制〕 [$r=.41\sim.71, \alpha=.81$]	
fa_a_4	父親は、よく私の相手をしてくれた。 .74	mo_b_4	母親は、私のしつけに厳しく厳格な教育方針をもっていた。 .83
fa_b_7	父親は、一緒にテレビを見ながら番組について私に話をしてくれた。 .69	mo_b_6	母親は、叱ったり批判することが私のためになると思っていた。 .72
fa_b_2	父親は、私の頭を撫でたり、私の肩をたたいたりしてくれた。 .66	mo_b_3	母親は、私の身なりについていろいろ注文をつけてきた。 .64
fa_b_5	父親と私は、2人で外出することがあった。 .64	mo_a_5	母親は、私に口答えを許さなかった。 .64
fa_b_1	父親は、世の中で起こっていることについて私に話をしてくれた。 .58	mo_b_10	母親は、私が悪いことをした時、かっとして怒った。 .55
fa_a_7	父親は、家族旅行などでいろいろな所に私を連れて行ってくれた。 .56	mo_a_9	母親は、私の帰宅時刻にうさかった。 .50
fa_a_6	父親は、自分の子どもの頃や学生時代の思い出について私に話をしてくれた。 .55	mo_a_11	私のことについては、母親が最後には決めていた。 .44
fa_a_1	父親は、自分の仕事や職場の出来事について私に話をしてくれた。 .54		
fa_a_8	父親は、私がどこで何をしているかをいつも気にかけていた。 .53		
fa_b_9	父親は、私の将来について気にかけていた。 .49		
fa_a_2	父親は、運動会や発表会などの特別な行事には来てくれた。 .47		
fa_b_11	父親は、私の誕生日には必ずプレゼントやカードをくれた。 .45		
〔II. 統制〕 [$r=.39\sim.71, \alpha=.78$]		〔II. 情動的絆〕 [$r=.39\sim.58, \alpha=.72$]	
fa_b_4	父親は、私のしつけに厳しく厳格な教育方針をもっていた。 .83	mo_a_6	母親は、自分の子どもの頃や学生時代の思い出について私に話をしてくれた。 .72
fa_b_6	父親は、叱ったり批判することが私のためになると思っていた。 .70	mo_b_7	母親は、一緒にテレビを見ながら番組について私に話をしてくれた。 .57
fa_a_5	父親は、私に口答えを許さなかった。 .68	mo_a_1	母親は、自分の仕事や職場の出来事について私に話をしてくれた。 .54
fa_b_10	父親は、私が悪いことをした時、かっとして怒った。 .55	mo_b_1	母親は、世の中で起こっていることについて私に話をしてくれた。 .52
fa_a_9	父親は、私の帰宅時刻にうさかった。 .46	mo_a_10	母親は、自分の好みの異性タイプについて私に話をしてくれた。 .50
fa_a_11	私のことについては、父親が最後には決めていた。 .45	mo_b_2	母親は、私の頭を撫でたり、私の肩をたたいたりしてくれた。 .47
〔因子相関〕 .18		〔因子相関〕 .12	
N=328 初期因子固有値>2.80; 初期説明率43.72% 適合度検定: $\chi^2_{(10)}=309.32, p=.001$		N=347 初期因子固有値>2.45; 初期説明率45.44% 適合度検定: $\chi^2_{(10)}=93.83, p=.001$	

[]内: r 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関値 / α : Cronbachの信頼性係数値

表2 自己肯定感尺度における単一次元性の検討

	(a)	(b)
self_1 私は、ありのままの自分が好きだ。	.75	.64
self_2 私は、困難なことがあってもくじけず頑張れる。	.73	.62
self_3 私は、自分がやればできる人間だと思う。	.73	.62
self_4 私は、今の自分を気に入っている。	.77	.66
self_5 私には、他の人に自慢できることがある。	.72	.61
self_6 私には、自分のことを理解してくれている人がいる。	.65	.54
self_7 私は、自分がやると決めたことは最後までやり通す。	.61	.49
self_8 私には、何でも話せる友だちがいる。	.60	.49
	初期説明率48.69%	$\alpha=.85$

N=352

(a) : 主成分分析における未回転第1主成分負荷量

(b) : 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関値 / α : Cronbachの信頼性係数値

2. 小学5・6年生の頃の親との接触経験が現在の自己肯定感におよぼす影響

(1) 重回帰分析

まず、親との接触経験下位尺度4得点と自己肯定感得点との間のピアソン相関値を算出した(付表1)。次に、親との接触経験下位尺度4得点を説明変数とし、自己肯定感得

点を従属変数とする重回帰分析(ステップワイズ法: 投入基準 $p<.05$, 除去基準 $p>.10$)を行った(表3)。対母親統制を除く3つの接触得点が自己肯定感得点に有意に影響をおよぼしていた。

(2) 共分散構造分析

現在の自己肯定感の規定因に関する因果分析を

表3 自己肯定感におよぼす対父親接触経験および対母親接触経験の影響—重回帰分析(ステップワイズ法)—

独立変数: 父親_I_情動的絆 父親_II_統制 母親_I_統制 母親_II_情動的絆		
従属変数: 自己肯定感		
父親_I_情動的絆	$\beta = .21$	$p = .001$
父親_II_統制	$\beta = -.15$	$p = .006$
母親_II_情動的絆	$\beta = .15$	$p = .011$
	$R^2 = .10$	$p = .001$

N=325

β : 標準偏回帰係数 / R^2 : 決定係数

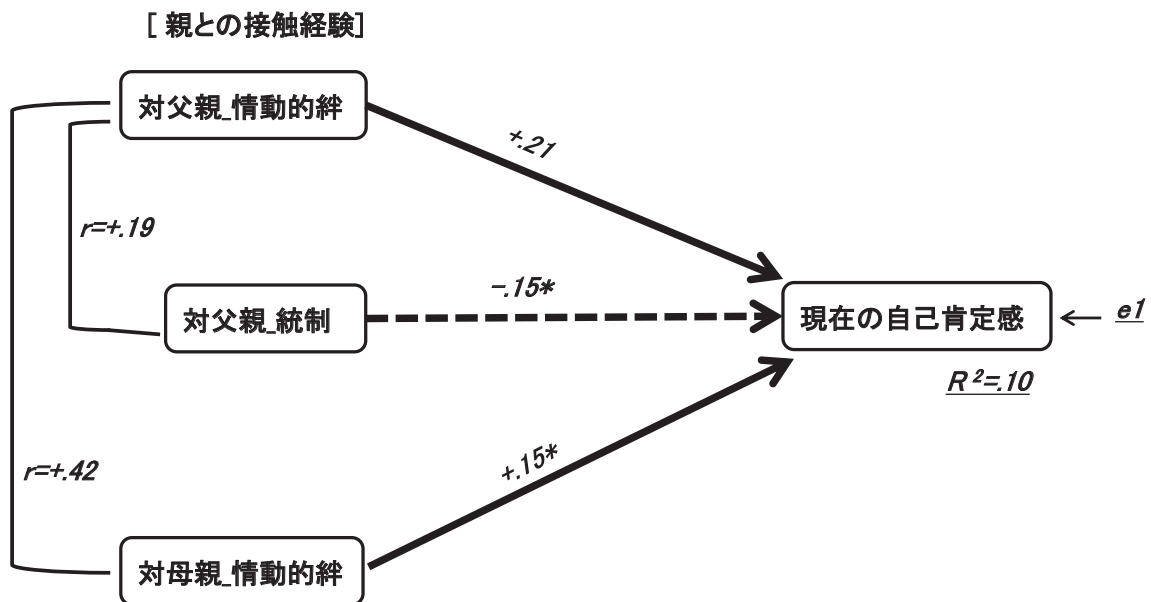
ステップワイズ法 (投入基準 $p < .05$; 除去基準 $p > .10$)

Amos28.0.0を用いて行った。前述した重回帰分析で認められた関係に基づきモデルを作成し、観測変数の構造方程式(最尤推定法; 豊田, 1998)の分析を実施した。修正指数を参照しながら観測変数間の相関を設定し、モデル適合度を改善した(図2)。有意な影響経路は、先の重回帰分析と同じであった。

IV. 考察

本研究では、最終変数として、Rosenberg (1979)の自尊心尺度ではなく(諸井, 2014), 岩永ら (2013)が作成した自己肯定感を大学生用に表現を修正した尺度を用いた。つまり、自己肯定感を表す項目のみを使用した。この尺度に関する因子分析では、2因子解も可能であった。しかし、a) 初期因子固有値が第I因子3.90, 第II因子1.00である、b) 第II因子に高い負荷(>.40)を示す項目が2項目のみであるという理由から、仮定通り8項目から成る単1次元尺度と見做した。岩永ら (2013)も中学生サンプルで同様に2因子解を得、自己認識因子と他者受容因子としているが、本研究の結果からは自己肯定感を2側面に分離することは統計的に意味がないと判断した。

さらに8項目を対象として主成分分析やCronbachの方法を用いて信頼性を検討すると、a) 主成分分析における初期説明率および未回転第I主成分負荷量、b) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関値やCronbachの α 係数値の点で、この尺度が単1次元性を充たす十分な根拠が得られた。従って、本研究で新たに用いた自己肯定感尺度に基づく尺度得点は適切であるといえよ



矢印: 標準化パス係数[*以外すべて $p < .001$; * $p < .01$]

適合度: $\chi^2_{(6)} = 114.78, p = .001; GFI = .99; AGFI = .90; RMSEA = .00$

図2 小学5・6年生の頃の親との接触経験が現在の自己肯定感におよぼす影響 (N=325) —観測変数の構造方程式による分析 (Amos28.0.0, 最尤推定法) —

う。

小学5・6年生の頃の父親と母親に対する接触経験に関する尺度の因子分析では、先行研究と同様に(諸井・小切間・荒木, 2010; 諸井, 2014; 諸井・芳賀, 2018), 父親, 母親それぞれで情動的絆と統制の2因子が抽出された。従って、この尺度の2因子構造は頑健であるといえる。

本研究の主目的である、過去の親との情動的接触認知が回答者が抱く現在の自己肯定感に対する影響を、重回帰分析と観測変数の構造方程式によって検討した。父親と母親との情動的絆経験はともに現在の自己肯定感を高める働きをしていた。これは、子ども時代の父親および母親との情動的交わりの重要性を示している。

ところで、長田(1987)は、わが国の家族関係の特徴として「夫婦疎遠」と「母子密着」を指摘した。つまり、夫妻、子どもという3者関係のダイナミックスの中で、夫側では会社、妻側では子どもとの一体化が生じる。「終身雇用制」や「集団の和」を特徴するわが国の会社風土のために夫の側には会社と強いつながりが生まれる一方で、伝統的性役割感によって妻側に「子育て」への動機づけの高揚が図られるのだ。

この長田(1987)の考えに沿うと、父親は子どもの自己肯定感の育みにはあまり影響をもたないと推測されるが、本研究における父親との情動的絆経験の結果は、この考えと一致していないことになる。これは、a) '91年のバブル崩壊(わが国の経済的成長の停止)、b) 家庭内の男女平等的方向への変容(諸井, 2003参照)などにより、家庭内で父親も重要な役割をもつようになったと考えれば、妥当な結果といえよう。

また、先述した長田(1987)が指摘するように、「夫婦疎遠」は妻の側により子どもへの密着を引き起こすことになる。このような母親による子どもへの過度の一体化、つまりわが国独特ともいえる「母子癒着」現象は、子どもにも様々な臨床的不全をもたらす(木村・馬場, 1988)。この考えに従うと、母親による統制経験は子どもの自己肯定感の育みに影響をもたらすはずである。しかし、本研究の結果は、母親の統制は自己肯定感と無関係であり、むしろ父親による統制経験は重回帰分析および観測変数の構造方程式の分析のいずれも自己肯定感に有意な影響を見せた。これは、家庭内における男女平等化の進行を前提にすれば、回答者の性別に起因していると推測される。本研究では女子青年を対象としており、回答者は母親と同性である。つまり、母親による統制の発揮のために発信される意見や命令を子ども側は同質的存在であるがゆえに許容しがちにな

る。従って、母親との統制接触経験は自己肯定感を損なうことにはならない。他方、異性である父親から発せられる意見や命令の場合には、異質である存在であるために反発を引き起こすことが多くなる。そのために、父親による統制経験は自己肯定感を損ねることにつながるのである。

ところで、本研究では、小学5・6年生の頃に両親がいたと回答した者に限定した。日本の離婚率はあいかわらず高い状態にある(厚労省, 2022; 2020年度の離婚率1.57(人口1000人あたりの離婚件数); 諸井, 2003参照)。離婚などによってどちらかの親のみとの接触経験に限定された場合に自己肯定感がどのように影響を被るかは、本研究では扱っていない。今後は、単独の親の影響を明らかにすべきであろう。

さらに、本研究では、先述した自己嫌悪感(図1)を自己肯定感とともに最終変数に据え、親と接触経験が2つの異なる自己評価におよぼす影響経路の共通点と差異点を検討することも重要な課題となる。

〈付記〉

(1) 本研究は、第2著者の迫田菜々子(同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科2021年度卒業)が第1著者の下で卒業研究のために立案・実施した。収集したデータを第1著者が再分析した。

(2) データの統計的解析にあたって、*IBM SPSS Statistics version 28.0.1.1 for Windows* と *IBM SPSS Amos version 28.0.0 for Windows* を用いた。

V. 引用文献

- 岩永 定・柏木智子・芝山明義・藤岡泰子・橋本洋治 2013 子どもの自己肯定意識の実態とその規定要因に関する研究 熊本大学教育学部紀要 62, 101-108.
- 木村 栄・馬場謙一 1988『母子癒着一母を拒み母を求めて一』有斐閣
- 栗田克実 2019 中学生の生活実態と自己肯定感に関する基礎的分析 保健福祉学部研究紀要(旭川大学), 11, 23-27.
- 水間玲子 1996 自己嫌悪感尺度の作成 教育心理学研究, 44(3), 296-302.
- 諸井克英 2003『夫婦関係学への誘い—揺れ動く夫婦関係—』ナカニシヤ出版
- 諸井克英 2007 家族機能認知とアダルト・チルドレン傾向 学術研究年報(同志社女子大学), 58, 85-92.

- 諸井克英 2014 女子青年における家族接触経験と自尊心
学術研究年報（同志社女子大学），**65**，51-59.
- 諸井克英・芳賀美乃里 2018 女子大学生における親との接
触経験と親子間呼称との関係—小学校時代の回顧—学
術研究年報（同志社女子大学），**69**，97-105.
- 諸井克英・小切間美保・荒木友恵 2010 女子青年における
食育経験の基本的構造（Ⅱ）—過去の親子接触経験と瘦
身願望との関係を中心に—総合文化研究所紀要（同志
社女子大学），**27**，125-136.
- 長田雅喜 1987 日本の社会構造と家族関係 長田雅喜（編）
『家族関係の社会心理学』福村出版 200-212頁
- Rosenberg, M. 1979 *Conceiving the self*. Basic Books.
- 佐藤有耕 1994 青年における自己嫌悪感の発達的变化 教
育心理学研究，**42(3)**，253-260.
- 田中道広 2008 自尊感情における社会性，自尊感情形成に
際しての基準—自己肯定感尺度の新たな可能性—下斗
米 淳（編）『社会心理学へのアプローチ〈自己心理学⑥〉』
金子書房 27-45頁
- 豊田秀樹 1998 『共分散構造分析入門 [入門編] —構造方
程式モデリング—』朝倉書店
- 吉森丹衣子 2015 大学生の自己肯定感における対人関係の
影響—コミュニケーションを重視して—国際経営・文
化研究（淑徳大学），**21(1)**，179-188.
- [インターネット]**
- 厚生労働省 2022 『令和2年（2020）人口動態統計月報年計
（概数）の概況』 [<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai20/dl/gaikyouR2.pdf>]

付表1 対父親接触経験，対母親接触経験，および自己肯定感との関係
—ピアソン相関値—

		f-1	f-2	m-1	m-2	s
父親_I_情動的絆	f-1	***	.21 a	.08	.43 a	.24 a
父親_II_統制	f-2		***	.22 a	.04	-.10
母親_I_統制	m-1			***	.09	.01
母親_II_情動的絆	m-2				***	.23 a
自己肯定感	s					***

N=325

a: $p < .001$

付表2 対父親・対母親接触経験〈過去〉尺度における残余項目

【対父親】

fa_a_3 私の異性の友だち関係について父親の方から尋ねてきた。

fa_a_10 父親は，自分の好みの異性タイプについて私に話をしてくれた。

fa_b_3 父親は，私の身なりについていろいろ注文をつけてきた。

fa_b_8 父親は，セックスに関する記事が載っている雑誌を私の目の前で読むことがあった。

【対母親】

mo_a_2 母親は，運動会や発表会などの特別な行事には来てくれた。

mo_a_3 私の異性の友だち関係について母親の方から尋ねてきた。

mo_a_4 母親は，よく私の相手をしてくれた。

mo_a_7 母親は，家族旅行などでいろいろな所に私を連れて行ってくれた。

mo_a_8 母親は，私がどこで何をしているかをいつも気にかけていた。

mo_b_5 母親と私は，2人で外出することがあった。

mo_b_8 母親は，セックスに関する記事が載っている雑誌を私の目の前で読むことがあった。

mo_b_9 母親は，私の将来について気にかけていた。

mo_b_11 母親は，私の誕生日には必ずプレゼントやカードをくれた。